

◆かっぱ民話シリーズ⑥◆

# 相模の河童まつり

さがみのかっぱまつり



作:近藤せいけん



相模の国の相模川にたった、一ぴきで住む、太郎河童。仲間が欲しくなり、大山の天狗様にお願いをしました。願いがかなって、天狗様のお使いのワシ殿が各地の河童に「太郎河童のひょうたんに入れた檄文」を届けてもらいました。

やがて、春はさくらの咲く頃、各地から河童族がかっぱ船に乗って、相模川にぞくぞくと集まってきました。

「太郎どん、太郎どん！わしらじゃ～およびに参上、遠野のかっぱ族、参上！」

「太郎どん、太郎どん！わしらも、参上！筑前若松のかっぱ族、ただいま参上！」

「わしらも、参上！島根の日野川のかっぱ族、ただいま参上！」

「わしらも、参上！五島列島の河童族（ガータロー）、ただいま参上！」

数十隻の和船がぞくぞくと相模川河口に乗りいれてきた。どの船からも「ワァー」という歓声があがり、ある船はふなべりをたたき、拍子木に似た（かっぱ拍子木）を打ち鳴らし、また竹で作った横笛（かっぱ笛）を鳴らし、太鼓（かっぱ太鼓）を打ち、にぎやかに入って来た。

各船には色とりどりの長いのぼり旗が風にまい、美しくもあり、楽しげであった。

太郎河童は大いに驚き、涙をながして歓迎した。先頭のかっぱ船に乗り移り、河童族と抱き合い、かっぱ語で挨拶を交わした。

「よう、来ていただいた、本当によう来てくださされた！」

「この相模の国に、ようこそ、こられた！」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

つぎつぎとかっぱ船を乗り移り、各河童族と涙を流し、抱き合った。

そうして、ひととおりの挨拶が終わると、先頭のかっぱ船に戻り、声をはりあげた。

「ご案内、つかまつる！」

「この太郎河童の、あとにつづかれよ！」

「いざ、いざ、まいらん、相模の河童さくらの宴へ」

かっぱ船の船団は隊列をつくり、上流へ、上流へこぎ進む。

時は春。兩岸のさくらの花が満開。大山に日が沈み始め、夕映えの中を進む。

さくらの並木に沿って、ぼんぼりが薄い灯りをともし、美しくさくらの花が映え、かっぱ船のかっぱ族もただ見とれていた。

やがて、相模川、中津川、小鮎川の三の合流地点に到着。兩岸は見事なさくらの競演であった、そこが相模の太郎河童の住むところである。

「さあ～おりられよ！方がた。この地が、わしの住む、かっぱ名で三流じゃ」

「わあ～何と美しい国じゃこと！」

「悠々たる霊峰大山、そして清い流れの三流、それにつづくかっぱの大地、良きかな、良きかなあ！」

太郎河童 「ここから見えるのが、かっぱ田。おいしいお米が沢山とれまする。」

「そして、かっぱ畑。ダイコンをはじめ、いろんな野菜がとれまする」

「そして、三つの川、鮎をはじめ、沢山の魚がとれまする」

大きな中州に、たくさんの席がもうけられており、各席にはダイコン漬、胡瓜漬、ナス漬をはじめ、沢山の漬物が積み上げられており、さらに鮎をはじめ、沢山の魚がところせましとおかれている。

また沢山の酒が入った樽が置かれていた。

「お酒は地酒のかっぱ酒！」

「米から作った（米酒）、ぶどうから作った（ぶどう酒）、なしから作った（なし酒）、いもから作った（いも酒）、みかんから作った（みかん酒）」

「さあ～さあ～かっぱ酒。さかずきになみなみ満たして、杯をあげましょう！」

「ご一同！ご唱和をおねがいつかまつる！」

「かん、かっぱ！かん、かっぱ！」

「お～お～お～」

いよ、いよ、太郎河童の待ちに待った瞬間である。

たくさんのかっぱが声高らかに、杯をあげた。

相模の国、太郎河童の里、三流。人間界と接しているが、人間には見えないかっぱ族のまつりの始まりである。

(終わり)